

関西大学墨跡展の記録（報告）

福井智佳子

はじめに

インフォメーションロビーに移した。

「墨跡展」は北棟アートギャラリーにおける展示としては九回目、年史展示としては第三次にあたる。以下、展示記録としてその報告をまとめた。

一 準備作業

企画案の調整

平成十年十一月十一日から十二月十九日まで、新関西大学会館北棟一階アートギャラリーで『関西大学墨跡展』を開催した。新関西大学会館は平成八年に竣工して以来、いまや大学の顔として機能しており、学生だけでなく、校友や地域市民も多く訪れる場所となっている（開館以来、大学が有する様々な資料の展示を担ってきたアートギャラリーだが、この「墨跡展」を最後に、平成十一年二月から、その施設を新関西大学会館南棟一階

年史展示は、年史資料編集室に残る資料により、本学の歴史を伝えることを目的とするが、平成九年二月に開催した『関西大学創設期展』、平成九年十月に開催した

『関西大学史展』の二回で、百十三年あまりの本学の歩みをたどるといふ所期の目的は達成できたといえるだろう（これらの展示については『紀要』第十号、第十一号に詳しい）。つまり、今回は本来の意味での企画展示となり、どういう視点から大学の歴史を伝えるかが重要な課題となった。

企画については、年史担当者間でさまざまな案が出されたが、百年史編纂当初からの担当者が、以前から温めていた企画、『墨跡展』を進めることに内定した。墨跡——創立者や大学に訪れた人が残した筆跡——は、それをしたためた人物の人となりや、その思いを雄弁に物語るものである。単なる色紙や書簡という枠を超えて、そこから見出せる年史的情報が多いのではないかという期待を込めた。

準備作業

今回は通常よりも短く、展示期間は約一カ月と設定されたため、できるだけシンプルな展示を心がけた。より

合理的に準備を進めるためである。

何より、文書資料の要素を多くもつ墨跡を展示するため、物を「モノ」として鑑賞する展覧型だけでなく、展示資料の中身にも目を通してもらえるような構成にしなれば、資料の意義を伝えきれないと判断したからである。そこで、展示構成は展示品とその説明、筆者の顔写真と人物説明という、展示品の基本情報のみを提示する形式をとった。

展示品の選定

展示品の選定は、年史資料編集室が保管している色紙、扁額、書、書簡の中から行った。大学の歴史のなかで大きな出来事の前後に、本学関係者が奔走するさまを伝える書簡や、記念式典の来賓者の揮毫など、当時の空気を色濃く残した資料を選定した。

これらの資料は、ほとんどが形態別に保管しているため（当室では色紙保管ファイル、書簡保管ファイルにそれぞれ現物を保存し、個人資料保管ファイルには複写資

料をおさめる方法を採っている)、今までの展示準備よりも資料をさがす手間が省け、スムーズに行えた。限られた展示ケースの中で、本学の歴史をできるだけ多く伝えるために、前回同様、ケース内の資料配置等、

構成には十分な検討を行った。また、よりシンプルな展示に、といふねらいもあり、展示開催前日まで展示品の二者択一に悩んだものもあった。最終的に決定した展示構成は次のとおりである。

展示ケースの概要

| ケース | ケース題 | ケースの概略 |
|-----|------------------------|---|
| 1 | 初期の卒業生 | 関西法律学校で勉学に励み、司法の精神を胸に社会へと羽ばたいていった本学草創期の卒業生の色紙を中心に展示する |
| 2 | 講師たちの横顔 | 関西法律学校が隆盛していった明治後半から旧制大学昇格までの大正時代に教鞭をとった講師たちの書簡を展示し、当時の学校運営や講師たちの勤務状況を探る |
| 3 | 学のまなびやを訪れた政治家たち | 本学で開催された記念式典や講演会等には国の中枢を担う政治家たちが多数訪れ、学生たちにさまざまな事を語りかけた。来学時に揮毫した芳名録や色紙を中心に展示する |
| 4 | 学長群像 ― 大学を育てた学長たち ― | 戦後、新制大学として発足してから現在まで、大学を愛し、育てた学長たちの色紙や書簡から当時の大学風景を回顧する |
| 5 | スポーツ関大を彩る人びと | スポーツ界で輝かしい成果を取めた校友の色紙を中心に、スポーツマン精神の一端に触れる |
| 6 | 明治から大正へ | 関西法律学校の設立に心血を注いだ創立者の書や、大正から昭和にかけて教鞭をとった講師の書を展示する |
| 7 | 才気あふれる校友たち | 演劇界で活躍した劇作家や新国劇俳優、さらに政治家や宗教家など多彩な校友の色紙や書等を展示する |
| 8 | 創立百周年を迎えて | 創立百周年記念行事では多くの著名人が来学した。さらに新たな第二世紀を踏み出した本学の様子を見る |

当初、展示品は色紙を中心に構成していたが、準備していく段階で、一つの疑問が浮かんできた。色紙の揮毫は、後世に残ることを前提とした墨跡である。そこに筆者の思いは多く残されて、見る者に伝わるだろう。では、時代の波にのまれながらも着実に歩んできた本学の姿を伝えるには、どんな資料を展示すればいいのだろう。この考えにとらわれるようになってから、原稿やメモのたぐい、つまり、文書資料の要素を多く含む資料を重点的に選択するようになった。

しかし、原稿等の資料は、形態別保存ではなく、個人情報との資料とみなし、個人資料保管ファイルにそれぞれ保存している。このため、資料を展示のコンセプトにおいてはめる方法ではなく、コンセプトから資料をさがす方法も加えた準備となった。

苦勞したキャプションづくり

だいたい資料が決定したのち、キャプション作成作業に入った。今回はひとつの資料につき、資料説明と人

物説明の両方を用意しなければならず、視覚的に、資料よりもキャプションが目立つことがないように留意した。そのなかで最も注意したのが、人物説明キャプションである。創立者や明治・大正時代の大学関係者については、史実や評価が確定しているため問題はなかったが、現在も活躍されている人物については、経歴等、どこまで記述するかが課題となった。最終的には、以下の内容を採録することが決まった。

一 肩書

二 生年月日、出身地

三 学歴（校友は本学卒業年月）

四 略歴、本学との関わり

このように、私見に偏らない内容を心がけたが、中には表現方法を十分に検討する必要があるものもあった。

しかし、時間の都合上、資料のケース搬入日に間に合わず、仮作成のキャプションを設置していたものもあった。その折、山野博史法学部教授（図書館長）が人物説明キャプションの校閲役を引き受けて下さることになった。



いしいひさいち展（平成10年10月12日～11月7日）

山野館長は、墨跡展の前に「いしいひさいち」展（総合図書館主催）を開催していた関係で、たまたまアートギャラリーに来られ、その際、話題となって急浮上したのだが、いわば業務外での協力をお願いすることになったのである。

他部署との連携

資料選定の際に印象的だったのは、他部署からの資料貸出・移管のことである。前回の展示の時も同様の協力が得られたのだが、今回は他部署から、「この資料も展示に加えたらどうか」という提案があり、さまざまな資料の貸出を受けた。

具体的には、秘書課から上田繁潔前理事長揮毫の扁額、学生課から服部嘉香元教授揮毫の学歌扁額をそれぞれ拝借した（展示終了後、これらは、両課に承諾を得て移管措置を取り、年史室の資料となった）。

また、十一月一日から開催された学園祭に、講演者として来学した越前屋俵太氏（かつて本学に在学・タレン

ト)にも、年史資料収集の目的と展示趣旨を説明して揮毫いただくこととなった。

さらに、前述した山野博士図書館長の協力のもと、いしひさいち氏(校友・漫画家)執筆の漫画原稿を加えることができた。これは、山野館長の提案で実現したものだ、これに伴う事務手続等を進める上でも、ひとか

たならぬ支援を受けた。

このように、予想もしていなかったさまざまな支援や協力があられ、墨跡展は充実したものになった。今回の件は、アートギャラリーでの展示、および今までの年史展示が、着実に人々に認められてきていることを実感させるものだった。

| 3 | | 2 | | 1 | | | |
|--|----------------------------------|-------------------|---|---------------------------------|--------------------------|-------|---------|
| 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 揮毫者 | 揮毫者履歴 |
| 犬養毅(木堂) 一八五五〜一九三二 | 織田 萬 一八六八〜一九四五 | 河上 肇 一八七九〜一九四六 | 高根義人 一八六七〜一九三〇 | 藤原楚水(喜一) 一八八〇〜一九九〇 | 内田重成 一八六八〜一九六五 | 揮毫者 | 揮毫者履歴 |
| 通信大臣(のち総理大臣) | 第十代学長 | 本学元講師 | 本学教頭 | 校友・関西法律学校に在学 | 第一回卒業生・貴族院議員 | 揮毫年月日 | 資料形態 |
| 大正十二年 四月二十九日 | 大正九年 〜十年? | 大正四年 七月二十九日 | 明治三十九年 六月七日 | 昭和五十七年 十一月 | 昭和三〇年 | 資料形態 | 資料内容・説明 |
| 芳名録 | 原稿用紙 | 軸装 (書状) | 軸装 (書状) | 色紙 (漢詩) | 色紙 (漢詩) | 資料形態 | 資料内容・説明 |
| 「無所畏」 「学の実化」講座に講師として来学 昭和七年の五・一五事件で暗殺される | 大正六年〜十一年まで学長に在任。旧制大学昇格の際の募金趣意書草稿 | 新学期からの出講を断る書簡 | 商業学科の開設に伴う教員編成に関するもの。高根は明治三十八年〜四十年まで教頭に在任 | 「少而不学長無能也」 金石文研究の泰斗、百三歳の際に揮毫 | 創立七十周年記念式典に校友総代として祝辞を述べる | 資料形態 | 資料内容・説明 |

| 5 | | | 4 | | | | 3 | | |
|------------------------------------|--|---------------------------------|--------------------------|-----------------------|-----------------------------|---------------------------------------|---------------|---------------------------------------|------------------------------------|
| 16 | 15 | 14 | 13 | 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 |
| 村山 実 一九三六～一九九八 桂 三枝 一九四三～ | 上田利治 一九三七～ 山口高志 一九五〇～ | 倉光安峯 一九二二～一九九八 | 大西昭男(映山人) 一九二六～ | 廣瀬捨三 一九一一～ | 中谷敬寿(寿山) 一九〇〇～一九八〇 | 岩崎仰一 一九八一～一九六〇 | 北川石松 一九一九～ | ポール・クロードル 一八六八～一九五五 | 北村徳太郎 一八八六～一九六八 |
| 校友・タレント | 校友・野球評論家 校友・野球選手、現オリツクスコーチ | 校友・テニス選手 | 第三十～三十四代学長 | 第二十六代学長代行、 第二十七代学長 | 第二十三、二十五代学長 | 第十七、十九、二十代学長 庁長官 | 推薦校友・国務大臣(環境) | 駐日仏大使・詩人・劇作家 | 校友・運輸大臣・大蔵大臣 |
| 昭和六十二年 五月十八日 | 昭和五十一年 十一月十四日 | 昭和五十六年 六月 | 昭和五十九年 春分 | 不明 | 不明 | 昭和三十五年 二月八、九日 | 不明 | 大正十一年 五月 | 不明 |
| (色紙 サイン) | (色紙 サイン) | 色紙 | | 色紙 (漢詩) | 色紙 | 原稿用紙 | 色紙 | 色紙 (メッセージ) | 色紙 |
| 学生時代を振り返える年史座談会の時に揮毫 | 野球部の先輩・後輩ならびに阪急ブレイブスの監督・選手としての座談会を開催した時のもの | 「精魂こめて好球必打」 昭和十三年デビスカップ杯出場選手 | 「神彩奕奕」 昭和五十八年度の卒業生に贈る | 「良辰美景賞心樂事」 | 祥久会三十周年記念会で揮毫したもの 「刎頸之交」 | 「関大」シリーズ「歴代学長伝」に掲載したもの。 児島惟謙について記述 | 「和」 | 大正十一年、第一回「学の実化講座」で講演。来学時に文学部の設置をアドバイス | 「落花不掃為留香」 本学には機会あるごとに記念講演会などで来学 |

| 8 | | 7 | | | | | 6 | | |
|------------------------------|--|--------------------|--|-------------------------------------|-----------------------------|----------------------------------|-------------------------|-------------------|---------------------------|
| 26 | 25 | 24 | 23 | 22 | 21 | 20 | 19 | 18 | 17 |
| 内藤湖南 一八六六〜一九三四 | 司馬遼太郎 一九二三〜一九九六 | 松本実道 一九〇四〜一九九九 | 森 寛紹 一八九九〜一九九四 | 島田正吾 一九〇五〜 辰巳柳太郎 一九〇六〜一九八九 | 北條秀司 一九〇二〜一九九六 | 原田 憲 一九一九〜一九九七 | 藤澤章次郎 一八七六〜一九四八 | 志方 鍛 一八五七〜一九三一 | 小倉 久(仏賜) 一八五二〜一九〇六 |
| 東洋史家 | 作家 | 校友・奈良西大寺管長、生駒宝山寺住職 | 校友・真言宗高野山管長 | 校友・新国劇俳優 新国劇俳優 | 校友・劇作家 | 校友・衆議院議員(運輸大臣、郵政大臣他を歴任)、 本学顧問 | 本学最初の名誉教授 | 創立者 | 創立者 |
| 不明 | 平成元年 十一月十三日 | 昭和四十九年 | 不明 (昭和二十七年所詠の句) | 昭和五十年 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 |
| 色紙 (複製) | 色紙 | 色紙 | 軸装 (俳句) | 色紙 (サイン) | 色紙 | 軸装 | 軸装 | 軸装 (漢詩) | 軸装 |
| 鹿角市先人顕彰会落成開館記念 「庚辛之際 紀恩詩」 | 「芳香千里」 百周年記念会館落成記念の国際シンポジウムに講師として来学 | 「春又帰」 迎春の言葉を揮毫 | 「いく度もしくれし月の庭に立つ」 昭和四十七年二月に高野山検校法印に昇格したことを記念し、この句が句碑として建立された | 創立八十周年を記念して新国劇が北條秀司作「司法権」を上演した時のもの | 日本演劇協会会長 「強情と人は言うなりわが正道」 | 「飛仁風以樹惠」 | 「身」 「泊園文庫」のもととなる書を寄贈 | | 茶室の命名を頼まれて揮毫したものの 「愚亭」 |

| 壁面 | 正面 | 8 | | |
|-------------------------------|----------------------------------|---------------------------------|--|--|
| | | 29 | 28 | 27 |
| 31 | 30 | 29 | 28 | 27 |
| 服部嘉香 一八八六～一九七五 | いしい ひさいち 一九五一～ | 上田繁潔 一九二一～ | 藤本義一 一九三三～ | 川上哲郎 一九二八～ |
| 本学元教授 | 校友・漫画家 | 第十二期理事長 | 作家 | 関西経済連合会副会長 |
| 不明 | 平成十年 | 平成七年 六月 | 昭和六十年 | 平成元年 十一月十三日 |
| 扁額 (学歌) | 漫画原稿 | 扁額 | 色紙 | 色紙 |
| 大正十一年、旧制大学昇格のため学歌を制定。作曲者は山田耕柞 | 朝日新聞連載「のちゃん」と週刊文春連載「のんき大国」に掲載された | 「21世紀への飛翔」 この辞句は大学映画の題名にもなった | 「人生は一幕の劇 主役を演じるもよし 傍役に徹するもまたよし」 関西大学百周年に寄せて揮毫 | 「和・不同」 百周年記念会館落成記念の国際シンポジウムに講師として来学 |

二 展示の開催

展示品について

こうして展示資料が揃い、平成十年十一月十一日に開催の運びとなった。

展示品の資料形態としては色紙が十五点と多く、書画

・七点、原稿資料・三点、サイン色紙・三点、書簡・二点、芳名録・一点となり、展示資料は三十一点におよんだ。

原稿資料のうちの二点は、旧制大学昇格時の織田萬(第十代学長)の「関西大学資金募集趣意書」と新制大学昇格時の岩崎卯一(第十七・十九・二十代学長)の原稿を展示した。

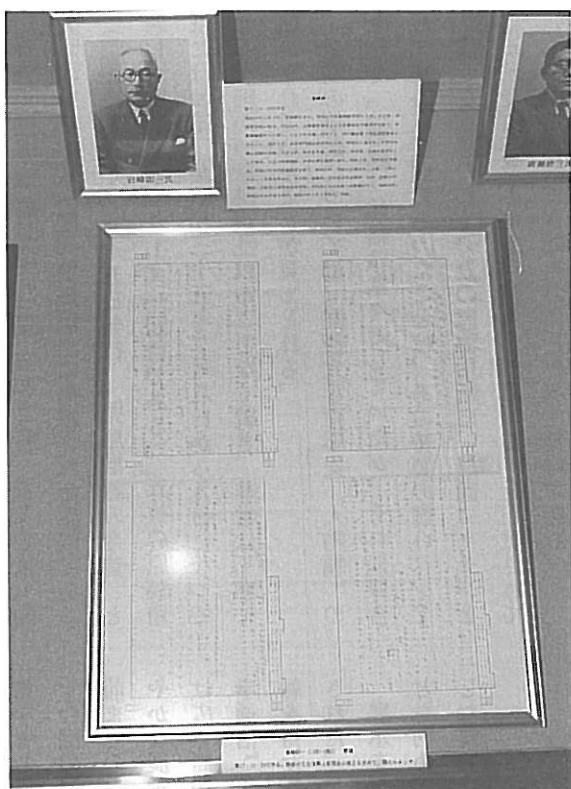


第2ケース・織田萬の直筆原稿と肖像写真

前者は、織田萬の直筆原稿で、旧制大学昇格のために必要な資金を募集する内容である。これは、大正七年に公布された「大学令」第七条で基本財産を供託することが義務づけられたことに基づくものである。専門学校令に準拠していた本学は、この大学令に従い、大正八年十二月に社団法人の解散と財団法人の設立を決議し、旧制大学昇格への布石を進めていく。

本学では大正十年十月に、「財団法人理事・織田萬 関西大学拡張後援会会長・山岡順太郎」の連名で「関西大学ノ規模ヲ擴張シ其内容ヲ充実シ以テ我關西ニ於ケル私立最高学府トシテノ機能ヲ發揮セシメントスル」という趣意書が作成された。本学関係者はこれをもって各方面へ寄付の募集に奔走した。

ただ、この趣意書と織田の草稿とは、文章表現や内容が異なる。またこれが何らかの正式な文書となった形跡は、他の年史資料からは確認できない。しかし、当時、法学部を有する私立学校として大阪に唯一存在する本学を「我が大阪ノ精神界ニ於ケル施設ノ欠缺ヲ補ヒ兼ネテ



第4ケース・岩崎卯一の直筆原稿と肖像写真

我が邦文化ノ発展ニ貢献スルコトヲ得タリ」と表現し、基本供託金を「巨額ノ基金」として校友に募集についての尽力を願うなど、行間に織田の熱意が汲み取れる興味深い資料である。

もう一点は、第十七、十九、二十代学長を務めた岩崎卯一の直筆原稿である。岩崎は戦後の本学にとって、重要な意味をもつ人物である。敗戦によって荒廃した本学と学生たちに「関大ルネッサンス」を提唱し、大きな希望を与えた。

岩崎自身も本学史上では特筆すべき存在である。列記してみると、大正四年、本学初の海外派遣留学生のひとりとなり、大正十年、本学初の専任教授に任命される。また、昭和九年、学部長制度が実施された際には初代法文学部長に選任され、昭和十三年には初代図書館長に就任している。そして、昭和二十二年、本学出身者として初の学長、さらに昭和三十年、公選制による初代校友会会長になるなど、本学における「初代」を多く冠する人物である。

今回の展示資料は昭和三十五年二月、校友会紙『関大』のシリーズ「歴代学長伝」に掲載された原稿である（昭和三十五年二月十五日発行、「児島惟謙の今昔」と題した寄稿文でシリーズ一回目である）。五枚の原稿用紙には執筆日が昭和三十五年二月八日から九日になっており、細かい筆跡が乱れることなく続き、非常に丁寧に執筆されていたことが見てとれる。

岩崎の筆跡については『関西大学百年史 人物編』のなかで「(前略) 体格は堂々としていたが、それに似合わず細心几帳面であったことは、あの特製の細いペンでこまかな独特のわくぐみの原稿用紙に、綺麗にキチンと書かれた文字をみても、明らかであった」と記載されているが、これはまさにそのことを示す資料である。

このように、原稿資料は書簡資料等と同様、人の側の側面を多く伝える。大学の歴史的な事態に直面する人物たちの、その息づかいが聞こえてくるような資料を、展示という形で公開できることは、担当者として嬉しいかぎりであった。

見学者の反応

今回の展示期間は、大学祭も終了した後から冬季休業前までの一カ月間だったため、混雑も少なく、比較的穏やかな展示となったが、アートギャラリーでの年史展示は広く周知され、休み時間を利用した学生や、『関西大学通信』や校友会機関紙『関大』の掲載記事によって情報を得た校友、散歩に訪れた地域住民の方々が多く見学された。

展示を見て、各界で活躍する人々が本学出身であることを初めて知って驚く学生や、恩師の書から往時を懐かしむ校友などの姿が見られ、展示の手心えを実感した。

三 展示を終えて

これからの年史展示

今回の展示は、一カ月間という短い期間ではあったが、その間に見学者にどれだけの情報を提供できるのか、それを知らない経験になったと考えている。「墨跡」をキ

ワードにしているため、展示内容が画一的になるおそれもあったが、資料と揮毫者の写真、それぞれの説明という形式をとったことで、展示全体に一定のリズムが生まれ、見やすいものになったと自負している。

しかし、成果を実感したと同時に、展示技術あるいは展示そのものの限界を感じたのもまた事実である。

現状の展示方法は、ケースに入った資料を見てもらうものが大部分で、視覚からの情報を専らとする。このことは展示の常套であり、ケース等を使用することは外的要素（空気による酸化や、水分、温湿度の変化による結露等）がもたらす資料の劣化を防ぐためである。展示行為が資料に与える負荷は少なからずある。従って資料を「外」と遮断し、外的負荷から守りながら展示を行うことが最重要であり、資料を守ることができない展示はあつてはならないとされている。

ただ、資料を守りながら展示をすることと、陳列ケースに入れただけの展示は同義ではない。資料の配列のみに傾注してしまい、展示の全体像を捉えられない事がな

いよう、常に自問しながら作業しなければならないだろう。

最近、注目を集めている展示方法に、見学者参加型がある。実際の資料（複製品の場合が多いが）に触れることで、より多くの情報を提供しようという試みである。ただ、これを実施することは、担当者に大きな心理的、物理的負担を課すことは言うまでもない。実際、この方法を年史資料に当てはめて考えると、はたして年史資料の展示の意義を深められるかどうか疑問も出てくるし、今回のような文書資料中心の展示では、それを取り入れても、新たに生まれる効果は少ないだろうと考えている。しかし、方法は異なっても、見学者参加型という事には大きな意味があり、当然、年史展示にも必要ではないだろうか。

年史展示にふさわしい「見学者参加」のあり方は何か、今後このことを検討し、答えを見つけていかなければならないと感じている。

四 課題と展望

写真資料保存についての取組み

今回の展示を通して、痛切に感じたのは、写真資料の保存体制を確立することだった。当室では、写真は被写体ごとに分類し、それぞれのファイルに収めている。フィルム、プリントともに散逸しないように撮影年月日、説明などの必要事項を明記して収集しているのだが、他部署から発見された古い時代のものや、撮影年月日等が確定できない行事写真などは、その整理に多くの時間を費やさなければならず、未整理となつてるのが現状である。しかし、この中に貴重な写真が多くあることも事実で、今回の展示に使用した写真資料の何点かは、この未整理の中から探し出した。

写真資料がもつ年史的価値は大きい。単なる記念写真であつても、その当時の学生たちの様子だけでなく、時代の風潮や風俗までも伝えるものが多く存在する。写真

は、撮影した当初は単なる記録でしかなくても、年月を経るごとに資料的価値が多義的になる。だからこそ、撮影当初に基礎情報を記入することは重要であり、それがない写真は、単なるセピア色の写真になってしまう。

保存作業を行ううえで、写真資料の劣化がもたらす資料的価値の損失は深刻である。当室にある明治時代の写真の映像が消えかけて白くなっているのを見るにつけ、また、収納棚を開けると漂う酢酸臭をかくにつけ、早急な措置をとらなければならないと危機感を持つのだが、日常の業務に追われ、後回しになっているのが現状なのである。

近年では、スキャナやデジタルカメラ等を使用して、写真資料の保存を試みる機関が多くなっている。写真はその材質の性質上、必ず劣化するため、デジタル化を行えば、写真が有する情報は保持することができる。しかし、日進月歩で新商品が開発されるこれらの機器をどのようにに取捨選択・利用していくのかは大きな問題であり、担当者による十分な検討が必要だろう。

おわりに

今回の展示では、その作業を通して、資料とは何か、年史とは何かをもう一度自分に問い直すこととなった。

それは、「墨跡」というキーワードで選んだ明治時代の資料と平成の資料が相互に大学の歴史を物語るのを見たとき、少なからぬ衝撃を覚えたからである。なぜ衝撃を覚えたのか。それは年史担当者である自分自身が、いつの間にか「古いものが年史資料」という認識をしてしまっている、年史業務の基本を忘れていることに気づいたからだった。

この業務を担う上で、つねづね「現代に残った資料は何を語りかけるのか、それに耳を傾けて作業をする」ように教わってきた。「年史の資料だからといって、古いものだけが貴重というわけではない」とも。今回は年史資料に「初心にかえれ」と叱られた気がしてならなかった。

資料の保存とは何か

平成十年、関西大学第一高等学校野球部が甲子園の土を踏んだ。春のセンバツは六十九年ぶり二回目、夏の大会は初出場、しかも春・夏連続出場という快挙だった。彼らはこの晴舞台で伸びやかに戦い、春のセンバツ（第七〇回高校野球選抜大会）で準優勝、夏の大会（第八〇回全国高校野球選手権大会）でもベスト8に入る快挙を成し遂げ、連日の熱闘にオール関大は熱気に包まれた。

その興奮のあとに残った関係資料は写真をはじめとして、新聞記事、メガホンその他の応援グッズ、ビデオ、監督や選手の寄せ書きなど多岐にわたり、しばらくは狹隘を極める年史収蔵庫と格闘しながら整理作業を進める日が続いた。

近年は収集する資料の種類も多種多様化し、どのように保存すればよいのか悩むことがしばしばある。

資料の収蔵スペースの問題は、年史に限ったことではない。他部署でも同様であるし、他大学の年史担当者もこの問題については頭を抱えていると聞く。資料は年々



両大会を通じて集まった応援グッズの数々

増加する一方であるし、その対応にも今まで以上のスピードが要求される。しかし、だからといって資料の収集・調査を止めることはできない。それをすれば年史業務を放棄することになるからだ。

この問題について、明治大学歴史編纂事務室の鈴木秀幸氏は「肝心なのは自らの部署・機関は何をめざすかということ」であり、「今後はとみに大学内、大学間、海外との交流・連携が求められること、さらには情報センターのような連絡・集約・案内の機関が必要になる」と指摘されている³。

年史業務の周辺には問題が山積している。早急に処置しなければならぬもの、長期を見据えて取り組まなければならぬものなどさまざまである。しかし、これに終わりはない。先の鈴木氏の言葉を借りて言うならば「歴史は続く、調査収集は続く」からである。

「歴史を知るといふことは、立ち止まって先人の道を振り返るものではない。自らも常に進みながら、先人の成したことを後世に伝えるということだ」と教えられた

ことがある。年史業務もしかりである。今回の年史展示は、そのことを常に心していたのか自問する機会となった。「立ち止まっていないか、いつも視野を広げて資料と接しているか」。年史担当者として強く自戒し、襟をただしてこの報告を終えたい。

注

(1) 大学令(大正七年十二月六日勅令第三百八十八号)

第六条 私立大学ハ財団法人タルコトヲ要ス但シ特別ノ必要ニ因リ学校経営ノミヲ目的トスル財団法人カ其ノ事業トシテ之ヲ設立スルコトヲ要ス

第七条 前条ノ財団法人ハ大学ニ必要ナル設備又ハ之ニ要スル資金及少クトモ大学ヲ維持スルニ足ルヘキ収入ヲ生スル基本財産ヲ有スルコトヲ要ス

この条令により一校あたり五十万円の基本財産が求められ、一学部を増すごとに十万円が加算された。本学は六十万円を六年にわたって分割供託を行った。

(2) 『関西大学百年史 人物編』岩崎卯一(昭和六十一

年十一月、四五五ページ)

(3) 織田 萬の草稿全文は以下のとおり(句読点筆者)。

関西大学資金募集趣意書

我が大阪ノ地由来稱シテ本邦經濟界ノ中心ト為スト雖モ精神界ノ施設殆ド見ルベキモノナク法律經濟商業等ノ學術ヲ教フルモノ僅ニ市立高等商業学校ノ一校アルノミ。本学創立以來此ニ三十有餘年漸ヲ逐ヒテ設備ヲ進メ今ヤ卒業生ノ數三千ニ垂ントシ在學生亦二千五百餘名ヲ算フ聊カ以テ大阪ノ精神界ニ於ケル施設ノ欠缺ヲ補ヒ兼ネテ我が邦文化ノ發展ニ貢獻スルコトヲ得タリト雖モ固ヨリ未ダ現状ヲ以テ甘ズルコト能ハズ。大ニ規模ヲ拡張シ設備ヲ完成シ以テ時勢ノ進運ニ応ズルノ道ヲ講ズルハ実ニ本学ノ任務ニシテ又吾等ノ素志タラズンバアラス。曩ニ政府ガ新ニ大学令ヲ發布シ官公私立ノ大学經營ヲ竝認ムルヤ各地ノ私学ハ皆争ヒテ該令ノ適用ヲ受ケントシ數タトシテ其準備ニ勉ムルアリ。此時ニ方リテ本学ノ如キ多年ノ歴史ヲ有スルモノ豈袖手傍觀シテ可ナランヤ。故ニ先ツ從來社団タリシモノ

ヲ改メテ財団トシ以テ基礎ノ鞏固ヲ図リ新ニ敷地ヲトシ校舎ヲ築造シテ将来ノ發展ニ備フル所アラントス。然レドモ大学令ニ依シテ其経営ヲ完ウセントセバ尚ホ幾多重要ノ設備アルノミナラス、政府ニ対シテ巨額ノ

と整理を中心に」（『明治大学歴史編纂事務室報告 第二十集』一九九九年三月三十一日）の統編にあたるものである。

基金ヲ供託スルノ義務アリ。多数ノ校友既ニ奮起シテ資金ノ醜集ニ任ズルアルモ、或ハ恐ル到底必須ノ額ニ達スルコト能ハザルヲ。儻シ幸ニ有力ナル篤志者諸賢ノ援助ニ依リ大学経営ノ事業ヲ成就スルコトヲ得バ一大教育機関ノ蔚然トシテ聳ユルヲ見ルニ至リ、我が大阪ノ精神界ニ於ケル功績益顯著ナルモノアラントス。而シテ是レ獨リ大正聖代ノ餘慶ヲ千載ニ遺スノミナラズ蓋シ亦諸賢ノ芳名ヲ永久ニ傳フルノ一大記念タラン。希クハ有志ノ諸賢吾等ノ誠意ヲ諒シ義財ヲ捐テ、以テ資金募集ノ計畫ヲ贊助セラレンコトヲ。

(4) 「大学資料の調査収集・その現状と課題」(『全国大

学史資料協議会東日本部会会報 大学アーカイヴズ』

No.21 一九九九年十一月二十一日)

なお、氏のこの論文は「明治大学の大学史料」収集

(ふくい ちかこ 出版部出版課主事)